

停電で信号止まり、ビクビク運転 噴火の避難用トンネルには明かり

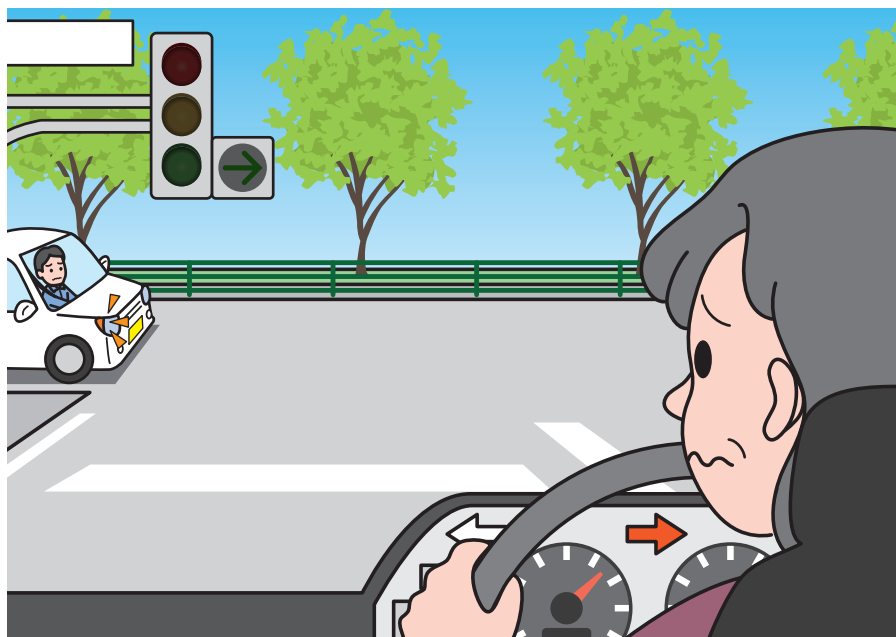
50代 女性 ガイド

地震が起きた午前3時、飛び起きて、飼い犬を抱えて、無意識のうちに玄関の扉を開けていました。テレビをつけて状況を確認していたら停電になったので、“朝起きたら電気がついているだろう”と考え、また寝ました。結局、翌朝も停電の状態が続いてました。

その日は、噴火湾で海外の方を案内するクルーズの予約が1件入っていました。地震で来られないのかなと思っていたけれど、クルーズに出るということで、朝の8時ごろ豊浦に向かって車を走らせました。

停電で信号が全部消えていたので、特に、T字路、十字路では、どう車を走らせたら良いのか、すごくビクビクしながら、走っていました。途中、有珠山の噴火が起きた時に避難路となるトンネルがあるのですが、その中の電気だけはこうこうと輝いてました。おそらく災害対策用の電気がついていたのだと思いますが、鮮明に覚えています。

うちは翌日の朝には電気がつきましたが、洞爺湖温泉も、道路1本挟んで、電気がついた、つかないがありました。すぐそこがついたから、うちもそろそろかなと思っても、なかなかこちらがつかないということは随分あったと聞きました。胆振東部地震を経験して、電気の線の区画があることに、改めて気づかされました。



地震は期末試験中 延期の電話通じず LINEで伝言 先生がスクラム組んで対応

30代 女性 高等学校教員

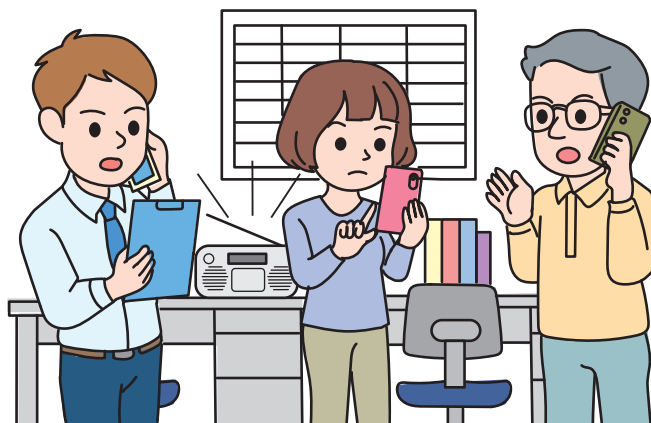
私は、徒歩3分で学校という教職員住宅に住んでいました。校長、教頭、事務長さんも同じ住宅で、朝、皆で集まって「大丈夫だった？」という話をしながら、学校へ行きました。教頭、事務長で学校の設備の点検をした後、教員が各自の持ち場を確認しました。私は理科室の担当だったので、薬品がこぼれたりしていないか、窓ガラスが割れていないかなどを確認しましたが、問題はありませんでした。

地震の3日前から地震の日までは、前期期末考査の期間でした。地震の影響で臨時休校として、テストの一部を翌週に延期を決めましたが、変更の連絡を回すのに、連絡網は電話でしたので苦労しました。電話が通じない家の生徒には、友だち同士のLINEで連絡先を知っている他の生徒に伝言を頼みました。

生徒からは、建物倒壊の報告はなかったですし、電気が止まったなどの生活の心配ぐらい。家にいなかった生徒の安否を心配して携帯にかけたら、「おばあちゃんの家に集合しています。無事です」と分かってホッとしました。

学校の規模が大きいので、日頃からの職員の連携はとれていました。教職員住宅では、発電機能をもつ車を持っている先生の車の電気を使い、炊飯器でご飯を炊き、お握りを作って、先生方に配るといったようなこともしていました。みんなでスクラムを組んで対応できたのは良かったです。

学校では、電話連絡網しかなかったことを反省し、地震後にメール配信サービスを使った連絡体制を作ることになりました。



水道水で作った特別なレタス、お世話になった人たちに

(名取市 60代 女性 農家)

パイプハウスとかで作っている野菜は井戸の水を汲んで使うのだけれど、津波のせいで井戸水が塩水になってしまいました。2年半たった今もダメです。田んぼの方は雨水のおかげで地面の塩がだいぶ抜けてきているけれど。

震災後、井戸水の代わりに水道水で野菜を作ることになり、今までブロッコリーやレタスとか5品目作っていたところを3品目がやっとになりました。自分で手を抜いたわけじゃないんだけど、抜かざるを得ない状態になってしまったのです。

いろいろ支援をもらってやっているんですが、ハウス栽培は一回やめしまうと元に戻るのが大変。自分たちも2年半の間に歳をとって体力が落ちてきていますから、土地が使えるようになって、今度は体やペースが元に戻らなくなってしまう。生産意欲を呼び戻すまでには時間が必要だなと感じています。気はあせているんですけどね。

水道水で野菜を収穫したら、ものすごい金額の請求がきました。水道水をかけて作った特別なレタスが初めてできた時は、支援してくれた人に渡しました。「売ってお金にした方がいいんじゃないの」と言われたけど、お世話になった人たちに食べてもらいたかったのです。



仙台市宮城野区 30代 男性 会社員



備えのない一人暮らしを反省

仕事中に地震が発生。事務所内はありとあらゆるものが倒れてきましたが、けが人もなく、全員無事でした。

その後、外に出ていた社員の安全と田舎の両親に無事なことを報告、幸いにもタイミングが良かったのか、メールで連絡をとることができて一安心。

その後は一人暮らしの寮に戻りましたが、メチャメチャな状態・・・。

一人暮らしの寮住まいのため、普段は自炊を全くせず、毎日の食事は外食とコンビニで冷蔵庫の中はカラ状態が当たり前でした。

田舎の両親に物資の発送をお願いしようとしたのですが、震災発生直後は、宅配便も動かなかったため支援物資も届かず、スーパーもコンビニもダメ・・・。大変な思いをしました。

今回の震災で食料の大切さを感じました。

もし一日前に戻れるなら、缶詰等の食料を買っていたと思います。



仙台市泉区 10代 女性 学生



電気がない生活に悪戦苦闘

懐中電灯から携帯電話に充電を

高校を卒業して大学入学前の春休み期間中に震災が起こりました。

その日は母と家において、揺れがおさまるまで家の中でうずくまっていました。茶の間のテレビがテレビ台から落ちたり、戸棚の中のものが落ちてきたりしました。

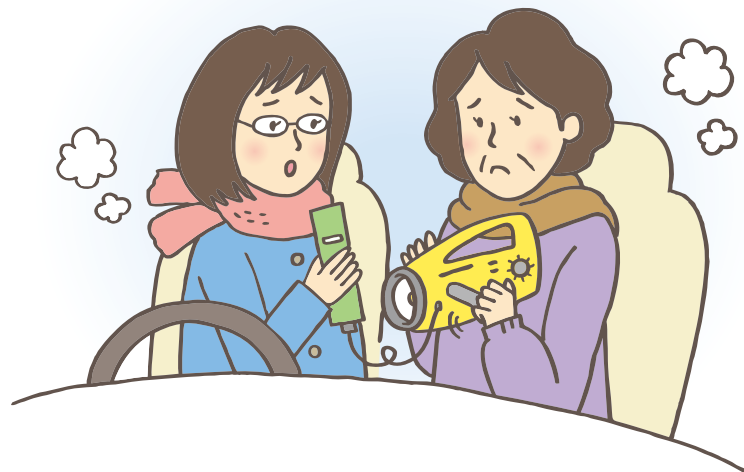
石油ストーブがありましたが、余震が怖かったので母と2人で自宅前に停めてある車の中で暖房をつけて過ごしました。

母の携帯電話がメールは受信しても返信ができなくなってしまったので家族へのメールを自分の携帯電話からしていました。携帯電話の充電がどんどん減っていくので、中学時代に授業で作った手回し充電の懐中電灯に携帯電話の充電ケーブルが付いていたので、それで充電していました。

震災の影響で大学の入学式が中止になりました。しばらくの間、家の電話やネット回線も止まっていたため、大学の入学式が中止になったという情報を得るのに苦労しました。

普段から電気に頼った生活をしていたことに改めて気づかされました。

もし地震の前に戻れるのなら、電気がなくとも家族や大切な友人たちと連絡をとりあえる手段をきっちりと話しておくべきだと思いました。



一日前プロジェクト

みんなでやってみよう!

簡単な手順を紹介します

まず、過去の自然災害(地震、水害)の中から対象を選ぶ

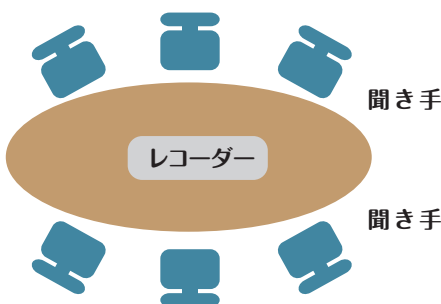
その災害の被災経験者や災害対応経験者に声をかける

みんなが集う場所と時間を設定する

※所要時間は2時間

なごやかな雰囲気の中で、当時を思い出しながら、体験したり感じたことを話し合ってもらおう

※話し手は、2~4人が適当



「教訓」や「知恵」につながる部分を拾い出し、タイトルをつける

テープ起しなどを基に、拾い出した部分を物語にする

※物語は、300~500字程度で、できるだけ切り口を残して編集

※物語の情景をあらわすイラストや写真等を添えると効果的

作成した「物語」を地域や職場のみんなに読んでもらう

気づき

共感

反省

「一日前プロジェクト」とは、地震や水害などの自然災害で被災した方や災害対応の経験をもつみなさまにお集りいただいて、

- 被災前後の行動
- 体験を通じて上手くいったと思うこと、失敗したと思うこと
- もう一度災害が発生したならば、次はどのように行動したいか
- そのために日頃から何を準備しておけばよかったか

といった本音の話をお聞かせいただき、これらの話から導き出されるさまざまな教訓や身につまされる体験をショートストーリー(エピソード)に取りまとめるという活動です。

こうして取りまとめたエピソードを広く活用・普及させることで、地域のコミュニティや国民一人ひとりに、防災・減災への関心や意識を高めていただくことを目的としています。

ここで紹介する物語は、ほんの一部です。一日前プロジェクトから生まれた物語は、内閣府の「災害被害を軽減する国民運動のページ」<https://www.bousai.go.jp/kyoiku/keigen/ichinitimae/index.html>に掲載されています。ぜひ、アクセスしてみてください!きっと、あなたの心を動かす物語が見つかるはずです。

■一日前プロジェクトの物語・イラストは、非営利の目的であれば、広報誌やパンフレットなどご自由にお使いいただけます。「災害被害を軽減する国民運動のページ」(<https://www.bousai.go.jp/kyoiku/keigen/>)からダウンロードしてください。



発行

内閣府(防災担当)

〒100-8914 東京都千代田区永田町1-6-1(中央合同庁舎8号館)

TEL 03-5253-2111 URL <https://www.bousai.go.jp>

